

【主催挨拶】(全文)

岸本 吉生 (ものづくり生命文明機構常任幹事・経済産業省中小企業庁経営支援課 課長)

今日は主催の安田先生に代わりまして私より今日の研究会の実施も併せて、ご挨拶をさせていただきますと思います。今回の催しは 2005 年より国際日本文化研究センターが続けてまいりました日本文明史の再建という研究プロジェクトの一環でございます。この研究プロジェクトは関係者が多数いらして、その関係者が集うかたちで 2007 年に NPO として、ものづくり生命文明機構というのを誕生いたしました。今日の催しについての共催というかたちで関係者がお見えになると思います。私はこの研究プロジェクトを始めたときに、経済産業省の環境経済所長をしておりまして、地球環境問題を担当しておりました。このご縁で今日も参加をさせていただいております。これまで研究会を数多くの地で行ってまいりましたが、今回、大分の地で開催するにあたりましては、管理理事長をはじめといたしまして日本文理大学の関係者のみなさまに心のこもったご準備をいただきまして、本当にありがとうございます。また、県議会の開会中にも関わらずご臨席を賜った広瀬知事に厚く御礼を申し上げます。今の国会で地球温暖化対策基本法案が審議されております。この法案が目標にしているのは 2020 年、温暖化ガスの排出量を 20% 削減するという大変野心的な内容でありますけれども、地球温暖化対策を本当に解決するためには先進国の削減量を 50% あるいは 80% 削減しなければならないといわれております。この目標は並大抵の努力で達成できるものではありません。社会全体のあり方を変えるような、そうした大きな取り組みが必要になると思っております。

また、世界の人口が増えるなかで、水問題、食糧問題も深刻になっています。これまでの物質文明のままでは 22 世紀を平和に迎えることができないのではないかというのが研究会の共通の問題意識でありまして、これに代わる文明のゲートを見出す価値観から変えていくというふうに思っています。その手がかりとして、我々がたどり着いたのが「生命文明」というキーワードです。日本が 1 万年前の縄文時代に営々と伝えてきた価値観、すなわち生きとし生けるものを等しく尊び、水の循環と生命の循環を大切にすること。そういう暮らし方を大事にすることが必要ではないかと思えます。わずか 50 年前には都会にも田んぼがありましたし川がありました。我々の周りには鳥や魚や虫がたくさんおりました。村には祭りがあり、天と地に感謝をして、四季のめぐりに感謝をしていました。お陰さま、お天道様という言葉で日常に感謝して暮らしていたわけです。人間は傲慢ではいけない。そういう戒めをもって暮らしていたわけです。そのことの大切さに気づいて「海の森づくり」を始められたのが、最初に基調講演をさせていただく畠山先生です。海の魚を守るために漁師が山の森に植林をすることは、決して神頼みでもおまじないでもない。自然の循環を取り戻すために我々が取り戻さなければならない不可欠な取り組みだと思えます。海の森づくりには日本を代表する鉄鋼メーカー新日本製鐵が乗り出しておられます。北は北海道から南は九州まで、各地で実験プロジェクトが始まっています。今日、後半のパネルディスカッションでは、林業、漁業をめぐる情勢には厳しいものがありますが、山の循環、海の循環を取り戻すことによって、水資源、あるいは海洋資源がどれくらい守られるのか。こうした問題についてみなさんと一緒に考えてみた

いと思っています。現在の産業社会は地下資源を消費する構造ですが、これには限界があるわけです。国際的にはアフリカ、あるいは南米を中心に鉱物資源、あるいは石油資源の争奪が激化していますが、日本は資源争奪戦争に将来を託すのではなく、別の取り組みをしなければならない。電力を例に挙げれば、温暖化対策として原子力に加え、風力発電、太陽光発電、スマートグリッド、こうした新しい取り組みが始まっています。日本は世界でも稀なものづくり国家です。ものづくりを通じて世界の平和、世界の繁栄に貢献する責務があるのではないのでしょうか。

ものづくり国家の将来展望として、グリーンイノベーション、ライフイノベーション、昨日、菅総理が国会に触れておりましたが、そういう言葉が語られ始めております。自然のしくみを今、一度見直して、自然界の知恵をものづくりに生かす。それによって省資源、省エネルギー、産業発展を同時に達成することができるのではないのでしょうか。その具体例として、カタツムリの殻を利用したタイル、シロアリの家を真似た住宅建設、水ではなく泡を使ったお風呂。こうした実用化が始まっています。そうした科学技術の未来について考えていらっしゃるのが、石田先生です。ネイチャーテックという概念を提唱していらっしゃいます。今日は日本文理大学の小幡先生が研究をされているトンボの羽を題材にどのようなライフスタイルが可能になるのか、様々なお話をお聞かせいただけるものと思います。今日はこの講堂に多くの大学生がお越しいただいています。いつも安田研究会はテーマはなかなかよいとは思いますが、来場者はかなり高齢でして、今日のこの若い雰囲気刺激を感じております。決して後の方で聞くだけでなく、基調講演、パネルディスカッションに質問、あるいは意見をぶつけていただいて、対応型で進めていきたいと思っております。今日の催しが皆さまにとって明日へのヒントになることを願ひまして、また、森里海連環とトンボの羽をはじめとする科学技術の発展を通じて大分県がますます元気になることを願ひまして、ご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。